

インターンシップ参加によるコンピテンシーの変化調査

－参加グループによる比較－

Survey of Changes in Competencies as a Result of Internship Participation

－ Comparison by Participating Groups －

○五十嵐 賢次^{※1} 池田 英俊^{※1} 久保田 真敏^{※1} 伊藤 建一^{※1}
Kenji IGARASHI Hidetoshi IKEDA Masatoshi KUBOTA Kenichi ITOU

キーワード：インターンシップ, PROG テスト, コンピテンシー
Keywords: Internship, PROG test, Competency

1. はじめに

新潟工科大学では、3年次の夏期休業中に原則2週間のインターンシップを正課目としてカリキュラムに取り入れている。これは選択科目であるが、これから就職活動を控える学生にとっては貴重な経験である。それとは別に4年前より、1・2年生を対象に夏期休業中に“地域産業探究”なる正課外の活動を始めた。県内各市と提携して、2日程度の短期の就業体験を行うもので、毎年30人程度は参加している。

これらの活動に参加することによって、学生には社会性が身に付くと考えられるが、それを検証するために3年後期に実施するPROGテストの特にコンピテンシーについて比較するものである。昨年度¹⁾も筆者の所属する建築都市学系の学生についてまとめたが、今年度は学年全体でコンピテンシーの変化を調査したものを報告する。

2. 方法

新潟工科大学の現4年生で、1年入学時と3年後期の両方でPROGテストを受けた学生は148名である。工学科は機械システム学系、電子情報学系、食品・環境化学系、建築都市学系の4学系に分かれ、各学系は定員を設けていないため学生は自由にこれを選び、人数もバラツキが見られる。電子情報学系と建築都市学系で78%の割合を占めている。これらの内訳は図1に示す通りである。

また図中には各学系における地域産業探究+インターンシップに参加、インターンシップのみ参加、インターンシップに参加しない3つの参加グループの人数も示している。特徴としては、電子情報学系の学生はインターンシップ不参加の割合が比較的高い、あるいは建築都市学系の学生は地域産業探究に多く参加していることが挙げられる。

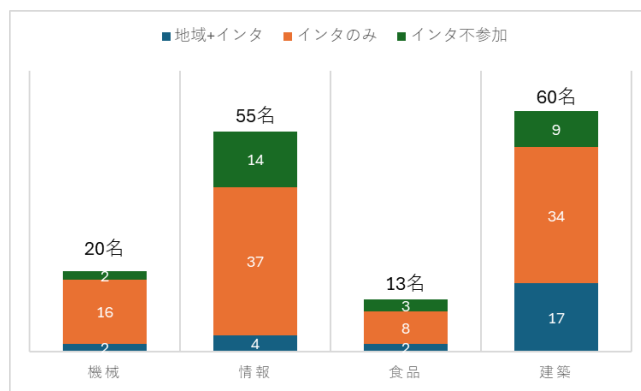


図1 各学系の人数割合

PROGテストのコンピテンシーは両側選択形式で行い、3分類9項目からなる。具体的には“対人基礎力”として親和力・協働性・統率力，“対自己基礎力”として感情制御力・自信創出力・行動持続力，“対課題基礎力”として課題発見力・計画立案力・実践力である。表1にこれらの参加グループの結果を示す。各項目は2段構成で、上段に1年生次、下段に3年生次の結果を示してその変化を分かり易くした。なおこれら数値は7段階評価で各グループの平均値を示し、右端には総平均として9項目の平均値を示した。

3. 結果および考察

3年生時点での総平均は全体で3.17、地域+インタは3.15、インタのみは3.19、インタ不参加は3.14であった。在学中の経験は人それぞれではあるが3つの参加グループではそれ程大差はない。地域+インタのグループでは対人基礎力が比較的高いが、対自己基礎力は劣る傾向にあった。昨年度は地域産業探究に参加した学生の数値が3.70と極めて高く私たちの望む結果となったが、今年度は想定通りとはならなかった。

インタのみのグループでは耐課題基礎力が高い傾向であった。インタ不参加グループでは対自己基礎力が高く、対人基礎力は劣る傾向であった。

^{※1} 新潟工科大学工学部工学科

表1 コンピテンシーの調査結果

上段：1年 下段：3年	人数	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力			総平均
		親和力	協働力	統率力	感情 制御力	自信 創出力	行動 持続力	課題 発見力	計画 立案力	実践力	
全体	148	3.24	3.03	2.64	2.89	2.68	3.01	3.28	3.32	3.61	3.08
		3.20	3.03	2.84	3.07	3.06	3.07	3.29	3.33	3.67	3.17
地域+インタ	25	3.96	3.48	2.68	2.68	2.88	3.28	3.00	3.64	3.84	3.27
		3.72	3.48	2.92	2.56	2.84	2.88	2.84	3.24	3.84	3.15
インタのみ	95	3.25	3.12	2.56	2.76	2.59	2.92	3.36	3.34	3.59	3.05
		3.22	3.03	2.81	3.01	3.13	3.00	3.41	3.42	3.67	3.19
インタ不参加	28	2.57	2.36	2.89	3.54	2.82	3.07	3.29	3.00	3.50	3.00
		2.64	2.61	2.89	3.75	3.04	3.46	3.29	3.11	3.50	3.14

また1年生時点の結果は全体で3.08、地域+インタは3.27、インタのみは3.05、インタ不参加は3.00であった。大学入学直後なので個人の資質や高校時代の経験値が反映されていると想定できる。地域+インタのグループの数値がかなり大きく、親和力・協働力といった対人基礎力や、計画立案力・実践力といった対課題基礎力で他のグループを引き離しており、部活動等に積極的に参加していたのではと窺える。インタのみとインタ不参加グループでも対課題基礎力は比較的高い傾向にあった。

各グループのコンピテンシーで、1年次から3年次の9項目の変化状況を図2に示す。この数値は3年次と1年次との差である。総平均として全体は+0.09、地域+インタは-0.12、インタのみは+0.14、インタ不参加は+0.14であった。地域+インタのグループを除いてプラス側に伸長しており、大学生活でそれなりの社会性が身に付いたと読み取れる。

インタのみのグループは自信創出力が+0.56と大きく伸びている。感情抑制力も含めた対自己基礎力が伸びているので、インターンシップに参加することで自己肯定感が増したのではないかと考えられる。機械システム学系、電子情報学系、食品・環境学系の学生でその傾向が見られた。

インタ不参加のグループはマイナスがなく、特に行

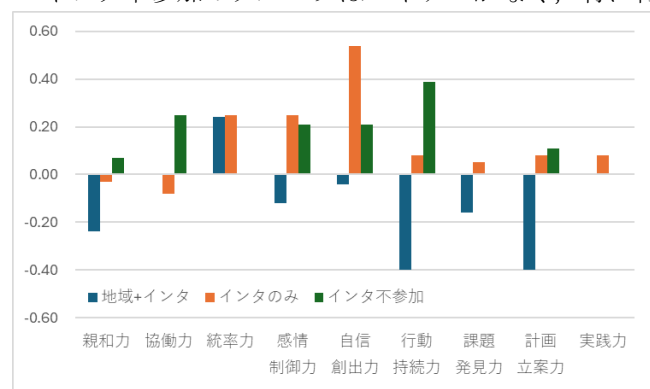


図2 コンピテンシーの変化状況

動持続力の+0.39を筆頭に対自己基礎力で伸長が大きい。インターンシップには参加していないが、食品・環境学系と建築都市学系の学生でその傾向が見られ、何かを継続することによって自信が得られた等が考えられる。

地域+インタのグループはマイナス項目が多かった。特に行動持続力と計画立案力が-0.40、親和力で-0.24である。このグループの人数は25名であるが、そのうち総平均のマイナス者は10名おり何れも建築都市学系の学生である。特に-1.50を超える者が3名おり、その影響が大きい。既に地域産業探究を経験しているので企業人との接触には慣れているはずである。インターンシップでは2週間を要したが、その内容が深まることで企業人との関わり合いや自分の行動、課題に対しての向き合い方について対応に苦慮した等が考えられる。昨年度とは違った結果になったので、数年はこれらの動向を着目し、その傾向を見極める必要がある。

4. おわりに

今回、インターンシップ参加によるグループ分けで、コンピテンシーの変化状況を調べた結果は以下の通りである。

- 1) 地域産業探究+インターンシップに参加したグループは1年次で高い数値を示したが、その後は伸び悩み3年次の段階では参加グループ分けによる差異は大きくなかった。
- 2) インターンシップのみとインターンシップ不参加のグループは、共に+0.14の伸長であった。

注および参考文献

- 1) 五十嵐賢次, 「インターンシップ参加によるコンピテンシーの伸長調査—建築系学生の場合—」, 2024年度工学教育研究講演会講演論文集, p.p.336-337